



白生公園にある開田碑が稲作の功績を伝え続けている

試作は失敗の連続

明治4年、仙台藩士族片倉小十郎元家臣たちが白石に入植した。米が作れない寒冷地とは知っていても米食への思いが断ち切れなかった。

明治7年に待望の種もみ2升(約3.5㍗)が開拓使から支給され、有志が植えつけてみたが実らず、以後支給は停止された。その後数年はこれに懲りて稲作を試みる人はなかった。

その後、毎年故郷の旧仙台藩白石領地から種もみを取り寄せては試作したり、明治10年ころには道南地方からあっせんされた種もみ、あるいは広島村の中山久蔵の開発した「赤毛」を分けてもらったりして作付けしていたが、気温が低いことごとく失敗した。

それでも試作は続き、白生公園にある開田碑の碑文によると明治14年に初めて成功したとされている。

明治14年(開田碑の碑文による。白石村史では16年)、白石村の望月寒川近くに入地した黒澤成教、安齊真睦、齊藤あつき、応熙らが主となり、白石村33番地の武田実維の地続きの荒れ地1,770坪(58.5㍗)を利用して共有田を造り、16年に札幌県勸業課から譲り受けた香早生という種もみを試作したところ、もみ79俵(約5,500㍗)を収穫した。

この共有田圃が現在の白生公園を取

り巻き、西は行啓通、南は白石中央3条通あたり、東は現在の変電所付近の中央6丁目、北は鉄道までの一帯である。

成功後も冷害に悩む

大きな収穫を得た明治16年の札幌付近は、イナゴの害と干ばつとで農作物は大被害を受けたが、谷地や沢地の水田は好成績だった。このようにして白石村も米作可能地として認められることになった。

翌17年には1町歩(約1㍗)に拡張したが、この年は6月15日で最高気温9.9度、8月18日でも14.7度という低温のため、実りが不十分で種もみを得ることができなかった。

しかし、米に対する人々の執念は本能的でさえあった。くじけることなく毎年稲作を続け、23年(1890)には水田開発以来の豊作で1反歩(10㍗)あたり平均1.7石、最高で3石(約180㍗)の収穫があった。

共有田でリスクを回避

途中で脱落する者もあったが新規参入者もあって、共有地は鉄道の北、現在の北郷にまでも及び、1戸あたり間口10間、奥行400間(約1町3反・約1.3㍗)最終的には27戸、34㍗にまで広がり、収穫も毎年増加し続けていった。

当時、寒地北海道は稲作不適とし麦を奨励した開拓使の方針にもかかわらず

米食への執念が、寒冷地に不適な米作を成功させた





白生公園。ここを囲んだ共有田で寒さのなかでの稲作が続けられた



昭和23年頃撮影の米軍航空写真では、白生公園付近一帯は水田地帯だった

ず、札幌付近で稲作を試みた人はかなりいたようだが、いずれも個人で、しかも小規模だった。

20 数戸が共同で水田経営を行ってリスクを和らげることが評判になり、札幌地方の水田経営の模範となった。その後道庁が今の札幌市立幌東中学校の向かい側に上白石村稲作試験場を造り、稲作の先駆者としての名声は確かなものとなっていった。

共有田として長期間続けられた理由は次の3点に集約される。

明治初期には、北海道のような寒冷地では“危険な作物”で、大規模に経営することは許されなかった。

当時の農業の主体はあくまでも畑作であり、稲作は余暇を利用しての試験的なものにすぎなかった。

この人たちは、旧仙台藩士として、団結心と信頼感が強かった。

なお、白石村の水田開発には、豊平外三村(平岸村、上白石村、白石村)の用水組合の功績も忘れられない。これは阿部仁太郎、佐藤珍平、菅野義実、大泉安定、砂金佐太郎、平塚直幹、日下茂次らの努力によって、明治27年9月に設立認可されたものである。

明治42年(1909)解散時に、この共有田は最後まで残った20戸に分割されたが、最も狭い土地で田圃1枚(10坪・33平方 m^2)が数戸あった。この狭小地は土地が肥沃なため苗代田に利用されていた。

また白生公園の南100 m に用水門があったが、これは結成された用水組合によるもので、精進川から導入された水を70 $\%$ 、望月寒川からの水を30 $\%$ 使用していた。

(塩見一釜)